

京都市における青年の意識の実態と課題

—— 京都市と他地域の高校生の意識の調査報告 ——

田 中 圭治郎 *

はじめに

京都市は建都1200年を迎え、その歴史性は奈良と並んで日本の他の地域とは比較できない伝統的なものがある。今日、その歴史性ゆえに様々な問題を内包している。それは1000年以上にもわたって日本の首都としての政治権力の凝集、文化の成熟、町衆の自立性をも意味している。都市として長期間機能している過程で生まれたそれらの諸機能は、京都独自のものだけではなく、都市そのものの機能であるのかもしれない。しかしながら、京都独自のものも、また存在することも事実であろう。

明治以降、京都は首都としての機能はなくなっている。また、江戸時代以降、政治権力は江戸に、また商業の中心は大坂、江戸へと徐々に移行していく。その中で京都は時代から取り残された存在となりつつある。ある意味で京都は観光の町、歴史的遺産の町としてそのアイデンティティを確かめる必要に迫られているかのようである。それゆえ、京都は保守的な町であるといえよう。しかしながら単なる保守的な町で終わらないところに京都の京都らしさがあるのである。京都は神社・仏閣が数多く存在している。それらの中に、時代の最先端を行くエレクトロニクス産業、ファッション産業が混在する。保守的なものと前進的なものが同居しているのである。

保守的なものと前進的なもの、すなわち過去を見詰める目と未来を見詰める目とが何ら矛盾なく共存している。それが京都なのである。保守的なものが改革的なもの、時代を先取りするものなのである。それはすなわち、京都の本質にせまる部分なのである。京都の歴史の中に連綿として流れる普遍性が何か存在するのである。それは日本の伝統的な文化・思想と21世紀を展望する理念が矛盾なく共存するだけでなく、伝

* 佛教大学総合研究所嘱託研究員（佛教大学教育学部教授）

統的文化・思想の中から21世紀が模索できうるものが導き出されてくる。すなわち、古いものが新しいもの、時代遅れのものが時代の先端を行くものなのである。

われわれは、時流に追い付くことにはたいそう関心があり、敏感である。それは、古くは中国大陆、朝鮮半島の文化の取り入れであり、新しくは欧米の文化を吸収することである。その際、われわれ日本人は従来自己が維持していたものを捨て去り、絶えず新しいものを取り入れることに全神経を集中する。とくに明治以降、欧米の文物を取り入れ、従来の文化遺産を捨て去ることにわれわれは何ら抵抗はなかった。われわれはそれを近代化と思い込むのである。東京はその典型的な町である。日本全国町の中心に何々銀座が存在する。ミニ東京を志向することが近代化であり、それが文化的都市であると勘違いしてしまう。このような視点からみれば、京都はたいそう遅れた、古臭い、カビの生えた都市なのである。京都は国際的な都市といわれている。しかしそれは歴史的遺産を持った都市だからという意味でそう呼ばれているのである。京都は古い、保守的なという意味では共通の認識がなされている。

京都市民は、どのような視点で物事を思考・行動しているのであろうか。京都の人間関係は複雑で、入り組んでいるといわれている。それは古い人間関係を引きずっているともいわれる。中世以来の町衆、町組の伝統が今日まで存続していることは事実であろう。しかしながら、それは今日の地域社会の人間関係とオーバーラップしていることも事実なのである。昔の人間関係と現在の人間関係が何ら抵抗もなく融合することができるのは、京都の都市機能・人間関係が過去・現在にかかわらず存在していることを意味する。京都の人々は、従来、政治権力の中心地に居住することによって、経済的な恩恵を享受してきた。その経済力で町衆は、ある程度権力から自立して、独自の活動を始める。武士が権力の中心として存在していた江戸とは若干その趣を異にする。京都市民はこのように、都市住民としての意識と自分たちが力を持っていたことによって権力への反骨精神を合わせ持った人々なのである。

教育についても同様なことがいえる。古来、支配階級には教育機会が与えられていた。貴族の子どもたちは、大学寮など支配者のための教育が用意されていた。しかしながら、庶民の子どもたちはそれらの教育機関とは縁遠い存在であった。彼らには、地域社会の中で、また家庭の場で、体験、経験に裏うちされた教育が行われたにすぎなかった。それらは日常生活に役立つ、かつ将来の職業の準備のための教育であった。彼らは、年齢に応じて必要な知識を、体験を通して体得していく。そしてある年齢に達するとその地域社会に居住するのに必要な知識をごく自然に身につける。そこには知識教育への拒否反応はない。知識と経験が何ら矛盾なく共存するのである。

しかしながら、江戸時代も後半になると、商業活動の高まりとともに、読み、書きという抽象的な知識、すなわち文字の学習が求められてくる。従来、文字は支配階級の独占物であったが、それが庶民階級にまで開放されてくるのである。寺子屋、私塾で庶民の子どもたちは抽象的知識を学ぶのである。

明治期に入ると、従来の複線型教育制度から、単線型教育制度（明治後期には分岐型教育制度になる）へと移行する。それが明治5年の「学制」である。すべての子どもたちが、等しく初等教育を受ける義務が生じてくる。しかし、ここで注目したいのは、京都市ではそれ以前にすでに初等教育機関である小学校が設立されていたということである。それは東京の文部省の権力とは若干距離を置いた、すなわち、自立的な教育制度・行政を京都自身が作り出していくのである。その中心となるのが京都市民である町衆であることに注目する必要があるだろう。

京都市の小学校は、京都市民が行政の手を借りずに、自分たちの財政で作りに出したものである。当時、初等教育は、日本各地で受益者負担という名目の下に、地域社会によって維持されていたという事情があるが、京都のように完全に、市民によって維持されていたということは希有であろう。京都市民の教育に対する情熱が理解されると共に、東京の文部行政への反発、抵抗が窺われる。

教育に対する京都市民の態度について述べてきた。京都市民は、京都が長い間、都であったことへの誇りと、現在そうでないことへの憤りとが相交ざった複雑な感情を持っている。それらは過去への愛着と、現在の都・東京を乗り越えようとする進取の気持ちへとつながるのである。京都市民は小学校建設だけではなく、第三高等学校を大阪から移転誘致する際にも大きな力を発揮する。それが京都帝国大学の設立へとつながる。同志社大学、立命館大学と共に、学問の都としての京都の誕生である。

この伝統は、第二次世界大戦後の京都の教育改革にも生き続けている。小学区制は子どもたちの教育の機会均等、学習権を保障するものとして、日本で最後まで維持された制度であり、文部行政に抵抗しても、自分たちが良いと信じた制度を守り続けた京都市民の情熱は評価するに値するのである。

本稿ではこのような京都市民の意識、態度を高校生の意識調査の中から探り出してみることが意図するものである。なお、京都と京都市という用語が混ざって使用されているが、ここでは京都を京都市に限定して使用しているのでどちらの場合でもその指す領域は同一である。

1. 意識調査の目的と意義

京都市民の意識を調査するには様々な方法が考えられる。本稿では、市民の中で若い世代を対象に調査を行った。これは、若い世代は、マスコミ、学校教育などにより、地域差が、年齢のより上の世代より少ないと思われるからである。そこでは京都市内の高校生（以下京都市内とする）京都府下郡部の高校生（以下京都府下とする）、大阪市内の高校生（以下大阪市内とする）、大阪府下の郡部の高校生（以下大阪府下とする）へのアンケート調査をすることにより、京都の特徴を抽出しようとするものである。それらは京都らしさとしての表れと推察されるからである。

調査時期は平成5年6月にそれぞれの地域の高校で行った。回収率は100パーセントである。調査対象者は、京都市内では103名、京都府下では135名、大阪市内では123名、大阪府下では129名、合計490名であった。先生、両親、老人、友人といった、学校教育、家庭教育に関するもの、自国の文化といった文化に関するものから始まり、学校での勉強、教科といった学校生活全般に関するものが次に問われた。これらの中から、高校生の家庭、学校、社会に対する態度が窺われるであろう。

最後に国際理解度について質問してみた。京都は、内に向かっての閉鎖的な町であると共に、外に向かっての開放的な町である。すなわち、伝統的な町であると共に、絶えず周辺の地域からの新たな人々の到来によって町の活気が維持されてきたからである。ヨソ者が排除される反面、ヨソ者が知らず知らずのうちに町の成員となっている町なのである。そこで、外国、外国人に対して若い人々がどのような態度を抱いているかを調査する中で、京都が外に開かれているのか、否かのメルクマールを模索したい。

2. 高校生の意識について

京都市内の高校生の意識と他地域の高校生の意識について述べてみる。表1は、4つの地域の高校生の、先生、両親、老人、友情、母国についての調査結果である。

表1 尊敬度・関心度について

	先生	両親	老人	友情	母国
京都市内の高校生	3.624	4.554	3.881	4.871	4.327

京都府下の 高 校 生	3.384	4.081	3.372	4.375	4.088
大阪市内の 高 校 生	3.099	3.955	2.928	4.604	3.862
大阪府下の 高 校 生	3.065	4.187	3.495	4.738	4.206

a. 先生について

「あなたは先生に対してどのように思われますか」という質問に対して、「たいそう尊敬する」を5, 「少し尊敬する」を4, 「どちらともいえない」を3, 「あまり尊敬しない」を2, 「全く尊敬しない」を1としてその結果を求めた。その結果, 京都市内が3.624とその平均値が一番高かった。その次に高いのが京都府下の3.384, 大阪市内の3.099, 大阪府下の3.065となっており, 京都市内, 京都府下の方が, 大阪市内, 大阪府下より高いことがわかる。京都市内の高校生の, 先生に対する尊敬度が高いということは, 先生と生徒の人間関係がうまくいっている証拠であろう。

b. 両親に対して

「両親に対してどのように思われますか」という同様の尊敬度の質問に対しても, 京都市内の高校生は自分の両親に対する尊敬度が4.554もあり, 大部分の生徒が両親に尊敬の念を抱いていることがわかる。

c. 老人に対して

「老人に対してどのように思われますか」という同様の尊敬度の質問に対しても, 京都市内の高校生は, 他地域の高校生と比較してみると高い平均値を示している。京都市内では, 三世帯の家庭も比較的多いためにこのような結果となったのであろう。

d. 友情について

「友情についてどのように思われますか」という質問に対して, 「たいそう必要である」を5, 「少し必要である」を4, 「どちらともいえない」を3, 「あまり必要でない」を2, 「全く不必要である」を1とし, その平均値を求めた。この結果は4つの地域の高校生ともに高い数値を示しているが, とりわけ京都市内の場合が一番高い数値を示している。

e. 母国の文化について

「自分の国の文化について、どのように思われますか」という質問に対して、「たいそう誇りに思う」を5、「少し誇りに思う」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり誇りに思わない」を2、「全く誇りに思わない」を1としてその平均値を求めた。ここでも、京都市内は、4.327と高い数値を示しており、生徒個々人の自分の持っている文化への誇りは、伝統的な都であった京都の住民ならではのものであろう。

以上5つの質問項目について述べてみたが、これらに共通していえることは、京都市内の高校生は、人間関係を大切にし、自分の持っている文化遺産を尊重するといった、たいそう貴重なものを持っている。

京都市内だけでなく、他地域の高校生に共通していえることは、友情といった友人関係を大切にする反面、学校の先生にはそれほど尊敬の念を抱いていないことがわかる。また、高齢者に対しても、比較的冷淡な反応を示す割に、自分の両親との関係を大切にしている。これは核家族の家庭が増え、祖父母との接触が少ないからであろう。自分の国の文化に対しても、一般的に考えられている以上に誇りを持っている。

3. 高校生の学習態度、勉強観について

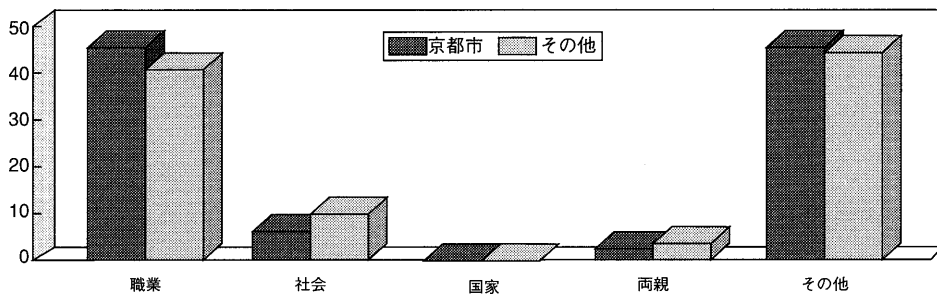
a. 勉強の目的について

表2、図1は勉強の目的についての調査結果である。

表2 勉強の目的について

勉強の目的	職 業	社 会	国 家	両 親	その他
京 都 市	45.5%	5.9%	0.0%	2.0%	46.5%
そ の 他	40.8%	10.2%	0.0%	3.1%	45.9%

図1 勉強の目的について



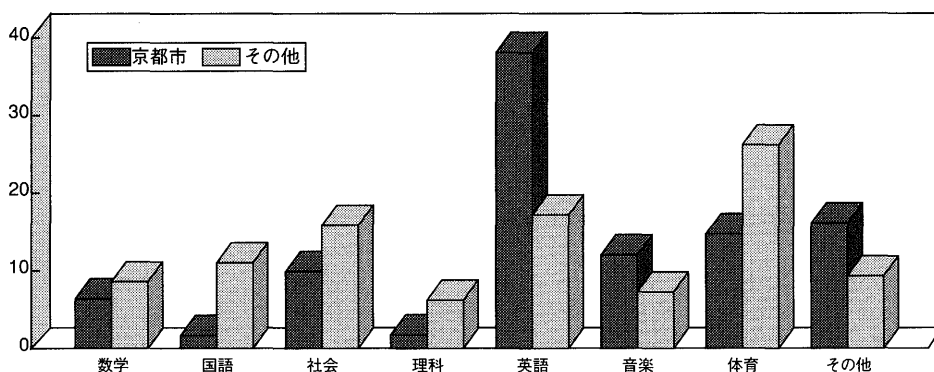
「あなたが勉強する目的は何だと思いますか」という質問に対して、「よい職業に従事するため」が京都市内の45.5パーセントに対し、他地域で40.8パーセントになっている。しかしながら、「その他」がそれぞれ46.5パーセント、45.9パーセントとなっており、その目的は多様である。ただ、高校生のほぼ半数近くが、将来の職業のために勉強していることがわかる。

b. 好きな教科について

表3 好きな教科について

好きな教科	数 学	国 語	社 会	理 科	英 語	音 楽	体 育	その他
京 都 市	5.9%	2.0%	9.9%	2.0%	37.6%	11.9%	14.9%	15.8%
そ の 他	8.8%	10.9%	15.5%	6.2%	16.8%	7.2%	25.6%	9.0%

図2 好きな教科について



「あなたが一番好きな教科を1つ選んで○をつけて下さい」という質問に対して、表3、図2にその結果が出ている。京都市内の場合、英語、音楽、体操の数値が高いのに反し、国語、社会の数値が低い。この原因は今後検討しなければならない課題であろう。

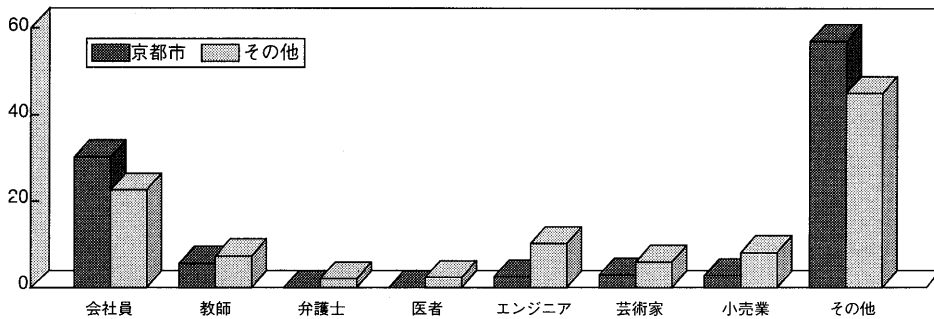
c. 将来の職業について

「あなたは、将来どのような職業に従事したいですか」という質問結果を表4、図3に示す。

表4 将来の職業について

将来の職業(希望)	会社員	教 師	弁護士	医 者	エンジニア	芸術家	小売業	その他
京 都 市	30.0%	6.0%	0.0%	0.0%	2.0%	3.0%	3.0%	56.0%
そ の 他	22.4%	7.3%	1.9%	1.9%	9.7%	5.4%	7.8%	43.5%

図3 将来の職業について



これをみると、会社員が多く、特に京都市内の場合、他地域よりも多い。サラリーマンとして堅実な道を歩くことをもとめる高校生が多いことを示している。

4. 外国への関心度について

a. 外国語の学習の経験について

「あなたは英語以外の外国語を学習したことがありますか」という質問に対しての結果が表5、図4である。「ない」が圧倒的に多いが、京都市内の方が若干、学習経験が多い。

表5 外国語の学習経験について

英語以外の外国語の学習経験	あ る	な い
京 都 市	7.7%	92.3%
そ の 他	5.3%	94.8%

b. 外国への渡航経験について

「あなたは外国へ行ったことがありますか」という質問結果が図5である。京都市内の場合、「ある」が42.5パーセントと他地域の7.5パーセントと比べてかなり高い。しかしながら、京都市内で調査した高校は国際交流の活発な高校であるため、42.5パーセントという高い数値を示したものと思われる。他の高校ではこのような高い数値を示さないかもしれない。

図4 外国語の学習経験について

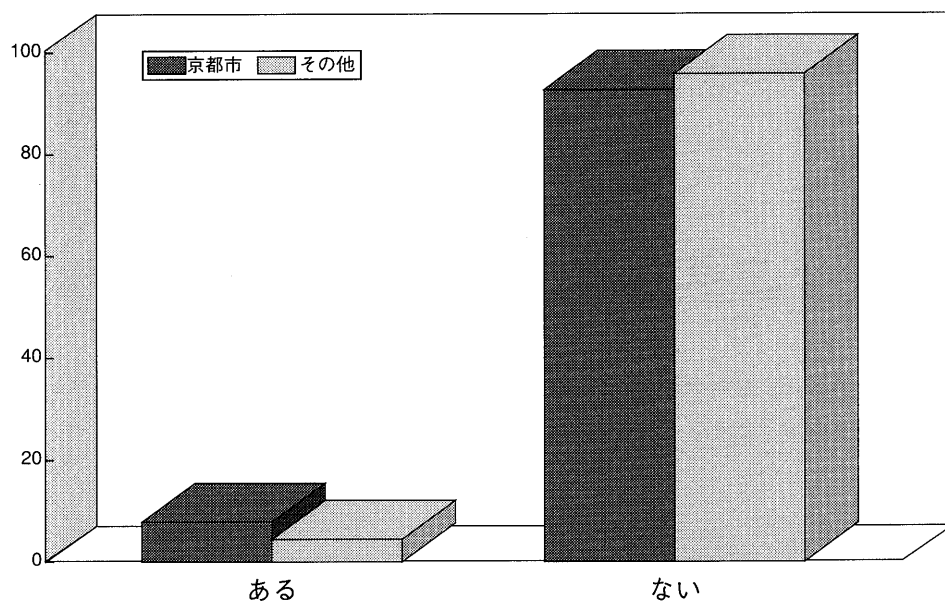
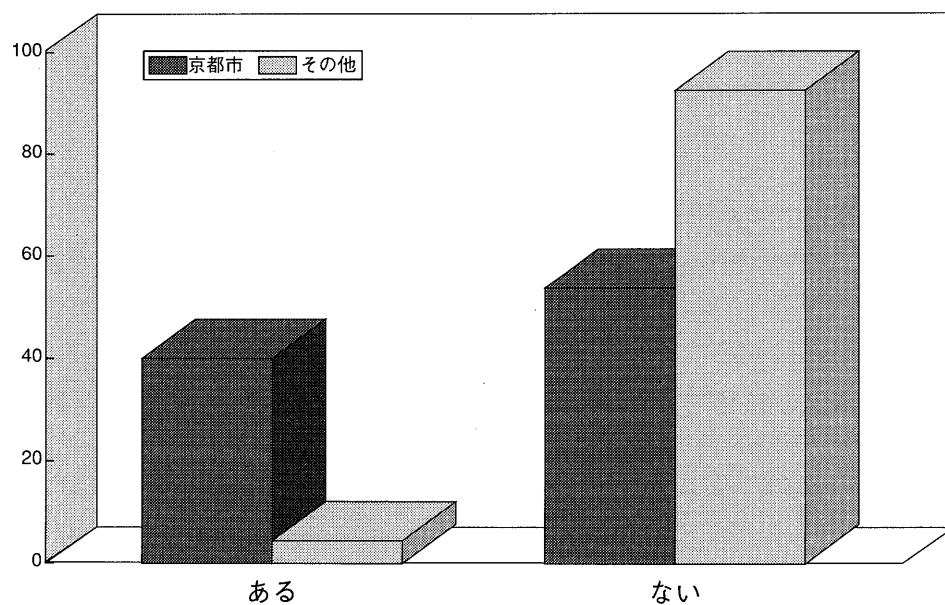


図5 外国への渡航経験について



c. 外国人との会話の経験について

「あなたは外国人と話しをしたことがありますか」という質問結果を表6に示す。

表6 外国人との会話の経験について

外国人との会話の経験	あ る	な い
京 都 市	92.5%	7.5%
そ の 他	64.0%	36.0%

この結果と図5を比べてみると、外国へ行ったことがない生徒が日本国内で外国人と会話をしていることがわかる。特に、京都市内の場合、渡航経験が42.5パーセントにもかかわらず、会話経験は92.5パーセントとなっている。これは外国人英語教師が各高校を巡回して教えているからであろう。それに反し、他地域では、そのような外国人英語教師の存在にもかかわらず、会話経験は64.0パーセントとかなり低い。

d. 外国の印象について

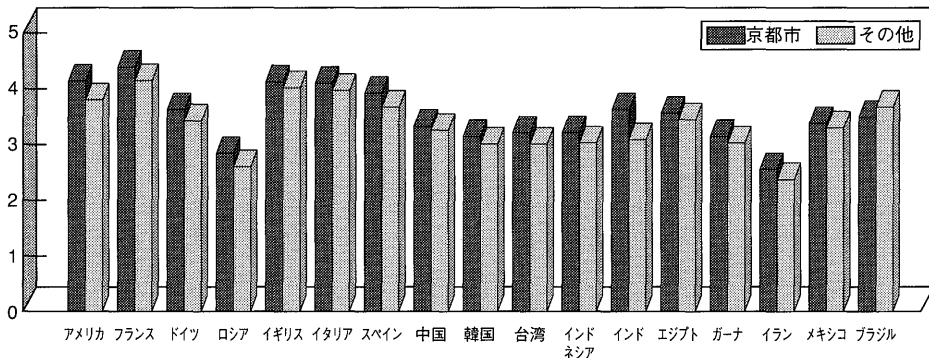
17カ国に対しての感想をたずねてみた。「大好き」が5,「少し好き」が4,「ふつう」が3,「少し嫌い」が2,「大嫌い」が1とし、その平均値を出してみた。表7, 図6はその結果である。これらを見ると京都市内の高校生の方が他地域の高校生よりも外国に対して好印象を持っていることがわかる。

表7 外国の印象について

外国の印象	アメリカ	フランス	ドイツ	ロシア	イギリス	イタリア	スペイン	中 国
京 都 市	4.000	4.183	3.404	2.650	4.019	3.941	3.706	3.154
そ の 他	3.576	3.953	3.201	2.447	3.843	3.796	3.528	3.077

外国の印象	韓 国	台 湾	インドネシア	インド	エジプト	ガーナ	イラン	メキシコ	ブラジル
京 都 市	2.990	3.029	3.039	3.466	3.382	2.990	2.388	3.262	3.330
そ の 他	2.848	2.868	2.822	2.935	3.251	2.878	2.197	3.165	3.509

図6 外国の印象について



5. 高校生の国際理解度について

——各国に対する好感度の比較——

高校生が外国についてどのような感じを持っているかを調査することは、外国に対してどの程度理解しているか、理解の程度はどのようなものを測定するバロメーターとなろう。ここでは17カ国を欧米7カ国、アジア6カ国、その他の地域の国4カ国に分類してみた。

a. 欧米諸国

(ア) アメリカ合衆国

アメリカに対しては、すべての地域の高校生の半数以上が「大好き」、「少し好き」である。京都市内の場合、「大好き」が35.9パーセントと他の地域に比べてたいそう高い数値を示している。特に「大嫌い」が0パーセントとなっているのが特徴的である。

表8 アメリカについて（無効標本数 21）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	37 (35.9)	34 (33.0)	27 (26.2)	5 (4.9)	0 (0.0)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	39 (28.9)	37 (27.4)	35 (25.9)	19 (14.1)	5 (3.7)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	25 (20.3)	42 (34.1)	39 (31.7)	15 (12.2)	2 (1.6)	123 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	26 (20.2)	38 (29.5)	43 (33.3)	18 (14.0)	4 (3.1)	129 (100.0)
合 計	127 (25.9)	151 (30.8)	144 (29.4)	57 (11.6)	11 (2.2)	490 (100.0)

(イ) イギリス

イギリスに対しては、アメリカほどではないが、高校生が好印象を持っている。イギリスの場合でも、京都市内は高い数値を示している。

表9 イギリスについて（無効標本数 19）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)

京都市内の 高 校 生	35 (34.0)	41 (39.8)	22 (21.4)	4 (3.9)	1 (1.0)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	40 (29.6)	48 (34.1)	42 (31.1)	3 (2.2)	4 (3.0)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	31 (24.8)	50 (40.0)	38 (30.4)	6 (4.8)	0 (0.0)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	28 (21.7)	57 (44.2)	93 (30.2)	4 (3.1)	1 (0.8)	129 (100.0)
合 計	134 (27.2)	194 (39.4)	141 (28.7)	17 (3.5)	6 (1.2)	492 (100.0)

(ウ) フランス

フランスに対して調査結果は表10に示されている。

表10 フランスについて（無効標本数 20）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	42 (40.4)	39 (37.5)	23 (22.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	104 (100.0)
京都府下の 高 校 生	41 (30.8)	48 (36.1)	40 (30.1)	1 (0.8)	3 (2.3)	133 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	34 (27.4)	55 (44.4)	32 (25.8)	2 (1.6)	1 (0.8)	124 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	42 (32.3)	46 (35.4)	40 (30.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	130 (100.0)
合 計	159 (32.4)	188 (38.3)	135 (27.5)	4 (0.8)	5 (1.0)	491 (100.0)

ここで特徴的なことは、フランスに対しては、アメリカ、イギリス以上に好感度が高いことである。京都市内の場合、40.4パーセントの生徒が「大好き」であり、「少し好き」を含めると77.9パーセントにもなっている。

以上の3カ国に対して日本の高校生は好印象を持っている。とりわけ京都市内の高校生はこれらの国々に好印象を抱いている。

(エ) ドイツ

ドイツに対しての結果は表11に示されている。

表11 ドイツについて（無効標本数 19）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	14 (13.5)	22 (21.2)	61 (58.7)	8 (5.8)	1 (1.0)	104 (100.0)
京都府下の 高 校 生	18 (13.5)	26 (19.5)	64 (48.1)	20 (3.8)	5 (3.8)	133 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	10 (8.0)	27 (21.6)	67 (53.6)	18 (14.4)	3 (2.4)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	11 (8.5)	29 (22.3)	65 (50.1)	22 (16.9)	3 (2.3)	130 (100.0)
合 計	53 (10.8)	104 (21.1)	257 (52.2)	66 (13.4)	12 (2.4)	492 (100.0)

ドイツに対しては、前述の3カ国に比べて比較にならないほど数値が低い。その理由は明確化できないが、第二次世界大戦後、日本とドイツとの関係が以前のように緊密的でなくなっているからであろう。ドイツに対しては、京都市内と他地域との差はあまりみられない。

（オ） イタリア

イタリアに対しての結果は表12に示されている。

表12 イタリアについて（無効標本数 22）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	26 (25.7)	43 (42.6)	32 (31.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	101 (100.0)
京都府下の 高 校 生	34 (25.4)	52 (38.8)	40 (29.9)	6 (4.5)	2 (1.5)	134 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	25 (20.0)	48 (38.4)	51 (40.8)	1 (0.8)	0 (0.0)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	32 (24.8)	44 (34.1)	49 (38.0)	2 (1.6)	2 (1.6)	129 (100.0)
合 計	117 (23.9)	187 (38.2)	172 (35.2)	9 (1.8)	4 (0.8)	489 (100.0)

イタリアに対してもドイツと同様、京都市内と他の地域との差はあまりみられないが、全般的に高校生はどちらかといえばドイツよりもイタリアに好感を抱いている。

(カ) スペイン

スペインに対しての結果は表13に示されている。

表13 スペインについて（無効標本数 21）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	18 (17.6)	39 (38.2)	42 (41.2)	3 (2.9)	0 (0.0)	102 (100.0)
京都府下の 高 校 生	16 (11.9)	39 (29.1)	69 (51.5)	6 (4.5)	4 (3.0)	134 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	17 (13.6)	37 (29.6)	65 (52.0)	6 (4.8)	0 (0.0)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	27 (20.9)	38 (29.5)	56 (43.4)	7 (5.4)	1 (0.8)	129 (100.0)
合 計	78 (15.9)	153 (31.2)	232 (47.3)	22 (4.5)	5 (1.0)	490 (100.0)

スペインに対しては、イタリアほど好感を持っていない。イタリアが持つ文化遺産がその理由かもしれない。しかしながら、ドイツよりは好感を持っている。京都市内の方が他地域よりも若干高い数値を示している。

(キ) ロシア

ロシアに対しての結果は表14に示されている。

表14 ロシアについて（無効標本数 23）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	4 (3.9)	8 (7.8)	46 (44.7)	38 (36.9)	7 (8.8)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	7 (5.3)	5 (3.8)	57 (42.9)	46 (34.6)	18 (13.5)	133 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	2 (1.6)	8 (6.6)	47 (38.5)	48 (39.3)	17 (13.9)	122 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	3 (2.3)	6 (4.6)	53 (40.8)	44 (33.8)	24 (18.5)	130 (100.0)
合 計	16 (3.3)	27 (5.5)	203 (41.6)	176 (36.1)	66 (13.5)	488 (100.0)

ロシアに対しては、他の欧米諸国とは比較にならないほどに、低い数値が示されている。すなわち、日本の高校生にあまり好かれていないのである。京都市内の場合、他地域に比べて「大嫌い」が8.8パーセントと少しすくないが、全般的にみて、嫌いの生徒が多いことは事実であろう。ただ、「ふつう」が京都市内で44.7パーセント、大阪市内でも38.5パーセントとかなり多く、今後の日本とロシアの関係により、これらの生徒が好きになったり、嫌いになったりして、ロシアに対する好感度も変化しうる可能性もあることも事実であろう。

b. アジア諸国

(ア) 中 国

中国に対する結果は表15に示されている。

表15 中国について（無効標本数 18）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	9 (8.7)	20 (19.2)	55 (52.9)	18 (17.3)	2 (1.9)	104 (100.0)
京都府下の 高 校 生	18 (13.3)	26 (19.3)	60 (44.4)	26 (19.3)	5 (3.7)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	7 (5.6)	32 (25.6)	56 (44.8)	24 (19.2)	6 (4.8)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	9 (7.0)	19 (14.7)	69 (53.5)	21 (16.3)	11 (3.5)	129 (100.0)
合 計	43 (8.7)	97 (19.7)	240 (48.7)	99 (18.1)	24 (4.9)	493 (100.0)

中国は日本の隣国であり、日本文化の源流であるといわれており、アメリカ並の好感度が期待されていたのであるが、結果をみると「ふつう」が半数前後と多数を占めている。「大好き」、「少し好き」も少ない。中国に対しては、京都市内の高校生は、他の地域の高校生ほど関心を持っていないようである。

(イ) 韓 国

韓国に対する結果は表16に示されている。

表16 韓国について（無効標本数 20）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	3 (7.7)	14 (13.5)	57 (54.8)	19 (18.3)	6 (5.8)	104 (100.0)
京都府下の 高 校 生	12 (9.0)	13 (9.7)	73 (54.5)	25 (18.7)	11 (8.2)	134 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	5 (4.0)	22 (17.6)	55 (44.0)	32 (25.6)	11 (8.8)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	5 (3.9)	12 (9.4)	77 (60.2)	19 (14.8)	15 (11.7)	128 (100.0)
合 計	30 (6.1)	61 (12.4)	262 (53.4)	95 (19.3)	43 (8.8)	491 (100.0)

韓国は、日本の朝鮮半島の植民地支配、在日韓国・朝鮮人の存在にもかかわらず、「ふつう」が京都市内54.8パーセント、京都府下54.5パーセント、大阪府下60.2パーセントと大きな割合を占める。大阪市内は、在日韓国・朝鮮人が多く居住しているため、「ふつう」が44.0パーセントと少ないようにみえるが、「少し嫌い」が他の地域と比べ25.7パーセントと多く、偏見、差別の環境が存在することを窺わせる。

(ウ) 台 湾

台湾についての調査結果は表17に示されている。

表17 台湾について（無効標本数 23）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	4 (3.9)	18 (17.5)	61 (59.2)	17 (16.5)	3 (2.9)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	8 (8.0)	11 (8.3)	77 (57.9)	26 (19.5)	11 (8.3)	133 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	7 (5.6)	14 (11.3)	68 (54.8)	29 (23.4)	6 (4.8)	124 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	6 (4.7)	8 (6.3)	87 (68.0)	17 (13.3)	10 (7.8)	128 (100.0)
合 計	25 (5.1)	51 (10.5)	293 (60.0)	89 (18.2)	30 (6.1)	488 (100.0)

台湾は戦前から日本との関係が密であるにもかかわらず、「ふつう」が半数を占めて

いる。

(エ) インド

インドについての調査結果は表18に示されている。

表18 インドについて（無効標本数 22）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	15 (14.6)	27 (26.2)	53 (51.5)	7 (6.6)	1 (1.0)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	14 (10.4)	16 (11.9)	62 (45.9)	34 (25.2)	9 (6.7)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	5 (4.0)	15 (12.1)	75 (60.5)	20 (16.1)	9 (7.3)	124 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	9 (7.1)	19 (15.0)	69 (54.3)	19 (15.0)	11 (3.7)	127 (100.0)
合 計	43 (8.8)	77 (15.7)	259 (53.0)	80 (16.4)	30 (6.1)	489 (100.0)

インドは中国、韓国、台湾と同様に「ふつう」が多いのであるが、他の3カ国に比べて「大好き」、「少し好き」が多い。京都市内の高校生の場合、インドに対して他の地域の高校生より、より身近に感じている。

(オ) インドネシア

インドネシアも前述のアジア諸国以上に「ふつう」の比率が高い。

表19 インドネシアについて（無効標本数 21）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	5 (4.9)	13 (12.6)	68 (66.0)	15 (14.6)	2 (1.9)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	10 (7.4)	10 (7.4)	78 (57.8)	26 (19.3)	11 (8.1)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	1 (0.8)	9 (7.3)	76 (61.8)	31 (25.2)	6 (4.9)	123 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	4 (3.1)	12 (9.3)	82 (63.6)	23 (17.8)	8 (6.2)	129 (100.0)
合 計	20 (4.1)	44 (9.0)	304 (62.0)	95 (19.4)	27 (5.5)	490 (100.0)

(カ) イラン

イランは古来ペルシャと呼ばれ、われわれに馴染みの深い国であるが、調査結果を見ると、ロシアと同様「少し嫌い」、「大嫌い」の比率が高い。京都市内の場合、「少し嫌い」「大嫌い」を合計すると54.3パーセントにもなる。ロシアの場合は、北方領土問題などのため、悪感情が存在することが理解できるが、イランの場合は、両国の関係に問題はなく、理解に苦しむ。その理由としては、イスラエル寄りの欧米のマスコミの情報のためであろう。欧米のマスコミ関係者にはユダヤ系の人が多く、ホメイニ以来のイスラム原理主義運動には危機意識を持って、イランに関する情報を世界各国のマスコミに流し続けた結果、日本の高校生もそれを信じたむきがある。

表20 イランについて（無効標本数 28）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	3 (2.9)	0 (0.0)	44 (42.7)	43 (41.7)	13 (12.6)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	2 (1.5)	2 (1.5)	48 (36.6)	47 (35.9)	32 (24.4)	131 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	0 (0.0)	2 (1.7)	44 (36.4)	43 (35.5)	32 (26.4)	121 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	1 (0.8)	3 (2.3)	49 (38.3)	50 (39.1)	25 (19.5)	128 (100.0)
合 計	8 (1.2)	7 (1.4)	185 (38.3)	183 (37.9)	102 (21.1)	483 (100.0)

c. その他の国々

中南米、アフリカの国々、すなわちメキシコ、ブラジル、エジプト、ガーナについての印象の結果を表21, 22, 23, 24に示す。

表21 メキシコについて（無効標本数 20）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	8 (7.8)	16 (15.5)	75 (72.8)	3 (2.9)	1 (1.0)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	9 (6.7)	22 (16.3)	81 (60.0)	19 (14.1)	4 (3.0)	135 (100.0)

大阪市内の 高 校 生	7 (5.6)	27 (21.8)	76 (61.3)	12 (8.7)	2 (1.6)	124 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	10 (7.8)	25 (19.4)	80 (62.0)	9 (7.0)	5 (3.9)	129 (100.0)
合 計	34 (6.9)	90 (18.3)	312 (63.5)	43 (8.8)	12 (2.4)	491 (100.0)

表22 ブラジルについて（無効標本数 19）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	12 (11.7)	22 (21.4)	60 (58.3)	6 (5.8)	3 (2.9)	103 (100.0)
京都府下の 高 校 生	20 (14.8)	32 (23.7)	69 (51.1)	10 (7.4)	4 (3.0)	135 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	16 (12.8)	43 (34.4)	58 (46.4)	6 (4.8)	2 (1.6)	125 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	26 (20.2)	38 (29.5)	56 (43.4)	7 (5.4)	2 (1.6)	129 (100.0)
合 計	74 (15.0)	135 (27.4)	243 (49.4)	29 (5.9)	11 (2.2)	492 (100.0)

表23 エジプトについて（無効標本数 22）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	16 (15.7)	20 (19.8)	55 (53.9)	9 (8.8)	2 (2.0)	102 (100.0)
京都府下の 高 校 生	18 (13.4)	29 (21.6)	59 (44.0)	21 (15.7)	7 (5.2)	134 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	14 (11.3)	37 (29.8)	50 (40.3)	20 (16.1)	3 (2.4)	124 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	17 (13.2)	29 (22.5)	56 (43.4)	19 (14.7)	8 (6.2)	129 (100.0)
合 計	65 (13.3)	115 (23.5)	220 (45.0)	69 (14.1)	20 (4.1)	489 (100.0)

表24 ガーナについて（無効標本数 31）

	大 好 き (%)	少し好き (%)	ふ つ う (%)	少し嫌い (%)	大 嫌 い (%)	合 計 (%)
京都市内の 高 校 生	5 (4.9)	4 (3.9)	79 (77.5)	13 (12.7)	1 (1.0)	102 (100.0)
京都府下の 高 校 生	7 (5.3)	10 (7.6)	84 (63.6)	22 (16.7)	9 (6.8)	132 (100.0)
大阪市内の 高 校 生	2 (1.7)	11 (9.2)	84 (70.0)	20 (16.7)	3 (2.5)	120 (100.0)
大阪府下の 高 校 生	2 (1.6)	9 (7.1)	92 (73.0)	14 (11.1)	9 (7.1)	126 (100.0)
合 計	16 (3.3)	34 (7.1)	339 (70.6)	69 (14.4)	22 (4.6)	480 (100.0)

これらの国々は、日本との関係が少なく、メキシコでは「ふつう」の平均値が63.5パーセントである。京都市内の場合、「ふつう」が72.8パーセントにも達している。それに対し、同じラテンアメリカのブラジルは、「ふつう」の数値が低い。それは、サッカー等ブラジルに対する情報の多さが高校生の意識にも影響を与えているのであろう。

次にアフリカのエジプトとガーナについて述べる。エジプトは古代文明の誕生の地であり、ピラミッド、スフィンクスと高校生でも学校の授業で学習して知っているため、「大好き」、「少し好き」の数値が比較的高い。

ガーナは日本にはほとんど情報が伝わってこないため、「ふつう」が京都市内77.5パーセント、京都府下63.6パーセント、大阪市内70.0パーセント、大阪府下73.0パーセントとなっており、過半数の生徒たちは、ガーナに対して、好き、嫌いはない。

以上、17の国を3つの地域に分けて述べてきた。この結果いえるのは、日本の高校生は、(1)欧米に関心を持っている、好感を抱いている、(2)欧米以外の国々にあまり関心を抱いていないため、「ふつう」の割合が多い、(3)東アジアの国々、中国、韓国、台湾に対しても「ふつう」が多い、という結果が出ている。京都市内の場合、欧米への関心度は、他の地域の高校生と比べ、かなりの割合で高いが、アジアを始めとする諸国には関しては、他地域の高校生と同様の数値を示しており、その反応は「ふつう」すなわち無関心である。

おわりに

本稿では、京都市の特徴を、京都市内の高校生と他地域の高校生の意識、国際理解度の比較研究の中から模索してきた。京都市内の高校生は、人間関係において、より緊密な関係を維持している。特に、先生、両親、友人との良好な関係は、家庭教育の躰の面で、また学校生活においてより充実した学習環境の点で、他地域と比較すると格段に優れている。現在、親子関係の希薄化、いじめ、不登校における友人とのあまり良好ではない関係が新聞紙上を賑わしているが、京都市の場合、いろいろと問題点はあるが、全般的には、予想されていた以上に良い数値が示されている。これは、伝統的な価値観が高校生の中にも生き続けているということであろう。文化遺産を伝承するという、良い意味での保守的な面が存在している。

次に国際理解度について述べてみる。外にどのように開かれているかがここで確認される。京都市内の高校生の場合、外への関心がたいそう高い。内なるものへの志向と外なるものへの志向が併存している。外なるものへの志向は、外への関心である。しかしながら、それは主として欧米への関心であり、自分たちの限定つきの外への開放である。他地域の高校生と比較して欧米への関心が高いということは、ある意味で経済的に繁栄している国々への関心が高く、それらの国々に好感を抱く反面、それ以外の国々には、他の地域の高校生同様、あまり関心がないということである。すなわち、より経済的繁栄への志向、自分達よりも「文化的」と感じる国々からの文物の吸収の意欲が、他の地域の高校生よりも強いのである。

これは、ある意味で権力への志向を意味するのかもしれない。自分たちが持っている、京都が日本の政治的、経済的中心であったという誇りと共に、既に失ったそれらを求める気持ちが人一倍強いから、それが、時として、進取の気質として、また改革的、進歩的態度として表面化するのであろう。